

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第5回【蔓ものの安全装置】

てっせんのほか蔓ものを愛さず

安東次男

6月になると藪のある所では地を這う蔓ものが育つ。鳥が種を運んでくるのだらう。猫の額ほどの庭にも花の終わった木瓜の幹や枝に絡んで天上をめざす。ヘクソカズラや烏瓜の蔓だ。秋になると乾いた黄金の実や真っ赤な実を付ける。部屋飾りにもなる。てっせんは6月に盛りをむかえるが、最近では様々な種類の花模様があつてうるさい。掲句からは濃い紫の色彩を連想する。花卉の形状は切れ味のよい両刃ナイフ。花卉をころがる梅雨どきの銀の玉とその色合いは美しい。

蔓ものといえば、この季節、菜園で育つ莢豌豆の姿に感心する。双葉から本葉がでると細い触手が伸びあがる赤子のつかまり立ち。ゆらゆらしているが翌日になると近くの支え棒や雑草に巻き付く。本体の茎は直立不動。驚くのは強風対策だ。スプリング状の渦がいつの間にか生まれる。多少の雨風にも対応し、折れやすい茎を守る。甜瓜、胡瓜、隠元、瓜、南瓜、いずれも蔓は酷暑の中でしぶとく己を固定し実を付ける。その収穫に感謝。節操なく様々な蔓ものを愛する所以である。